

表3 秋期産卵ひび割れ卵における S. Enteritidis 増殖卵の割合

保存温度	産卵後の日数									
	6日目	9日目	13日目	16日目	20日目	23日目	27日目	34日目	41日目	41日目
10℃	NT	NT	NT	11/20* (55)	1/20 (5)	11/20 (55)	NT	NT	NT	NT
20℃	2/20 (10)	1/20 (5)	1/20 (5)	11/20 (55)	8/20 (40)	12/20 (60)	8/20 (40)	NT	NT	NT
30℃	4/20 (2)	1/20 (5)	3/20 (15)	19/20 (95)	16/20 (80)	17/20 (85)	3/8 (37)	NT	NT	NT
22日目に10℃から 30℃へ変動	NT	NT	NT	NT	NT	9/20 (45)	6/20 (3)	13/20 (65)	17/20 (8)	

*S. Enteritidis 検出陽性卵数 / 供試卵数 (%)

NT: Not tested

保存前の供試卵における割合は8/20 (40%) であった。

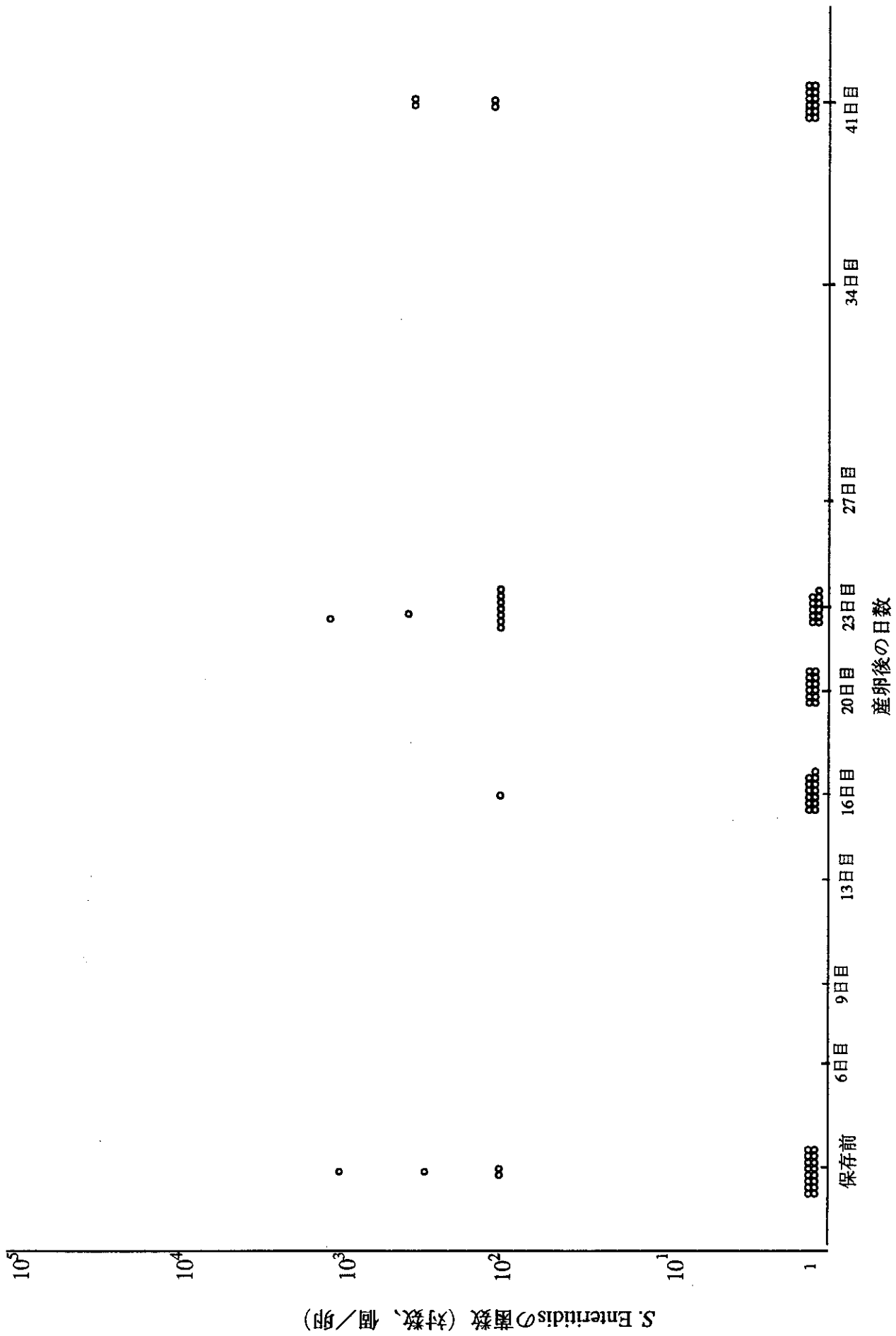


図1 夏期産卵の卵における10°C保存時の *S. Enteritidis* 増殖性

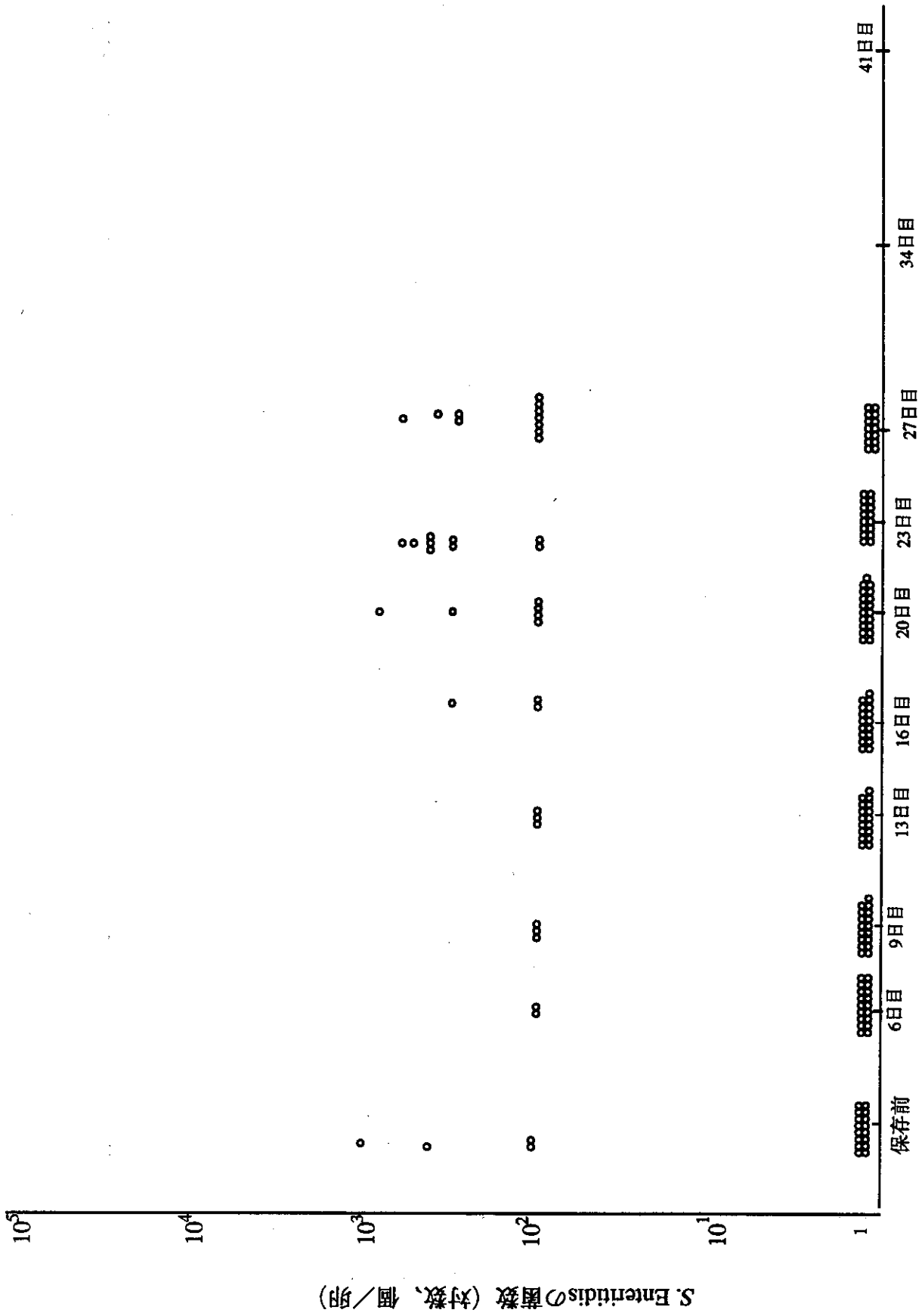


図2 夏期産卵の卵における20℃保存時の S. Enteritidis増殖性

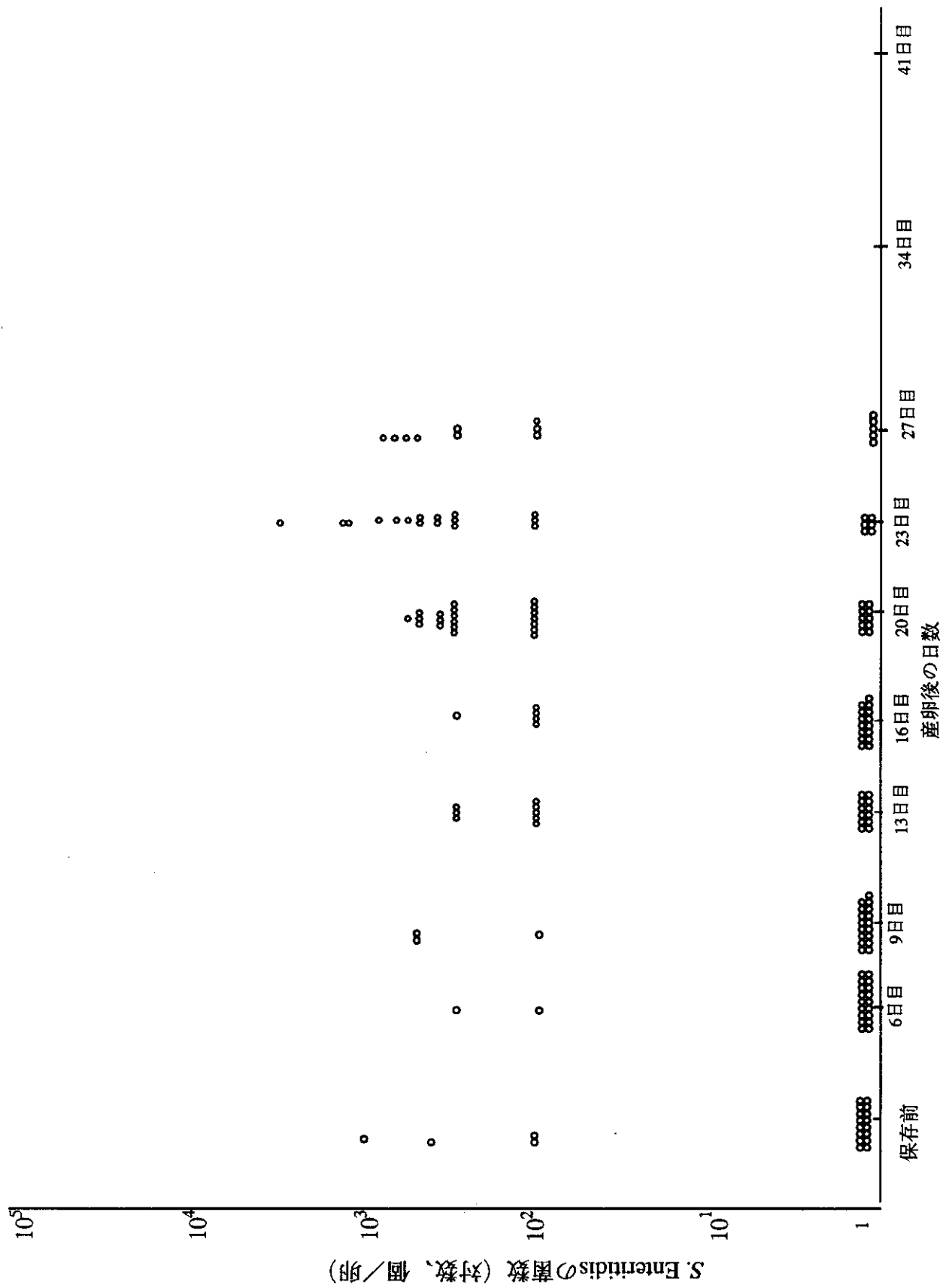


図3 夏期産卵の卵における30°C保存時の *S. Enteritidis*増殖性

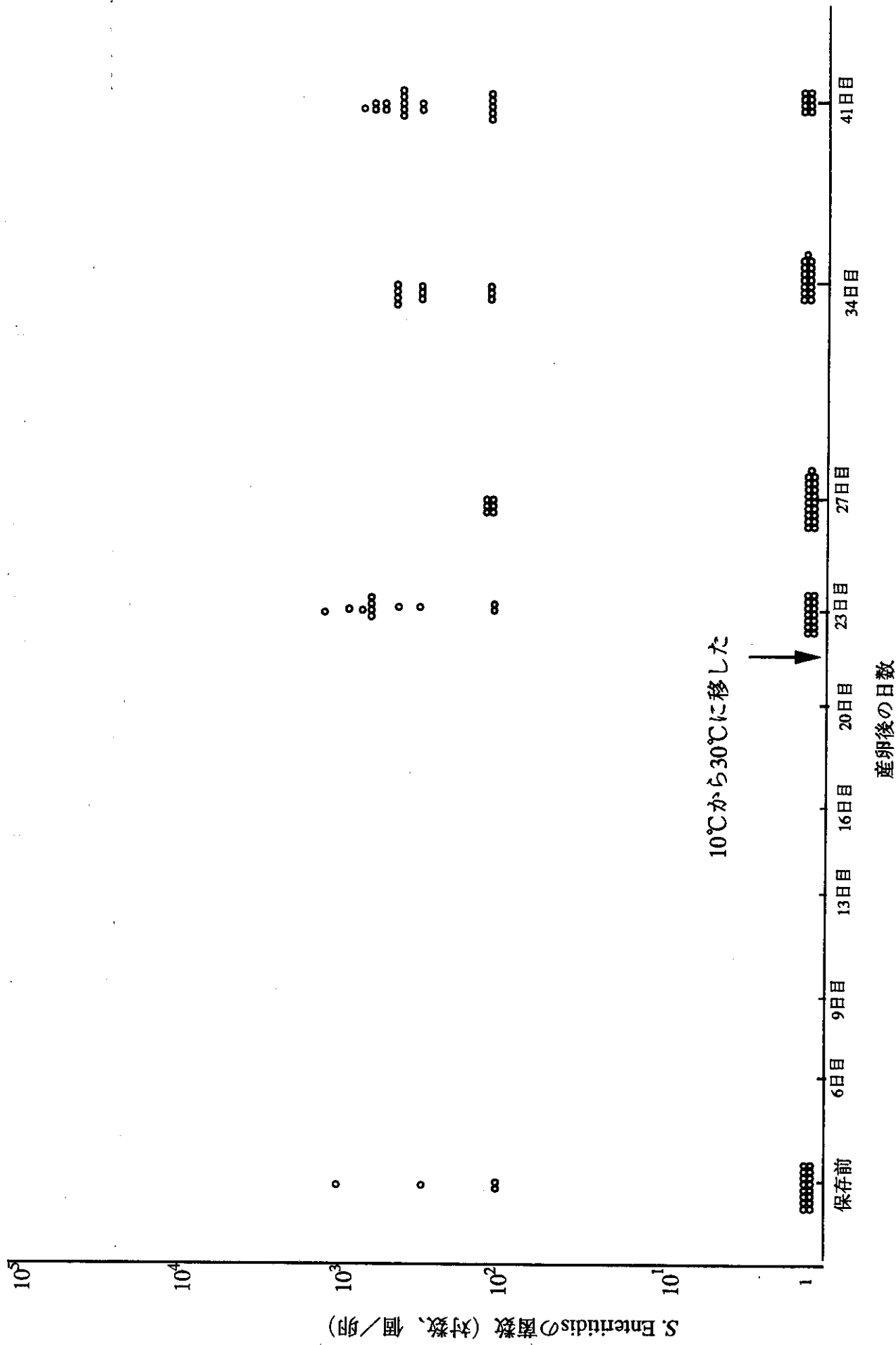


図4 秋期産卵の卵における10°Cから30°C保存時の S. Enteritidis増殖性

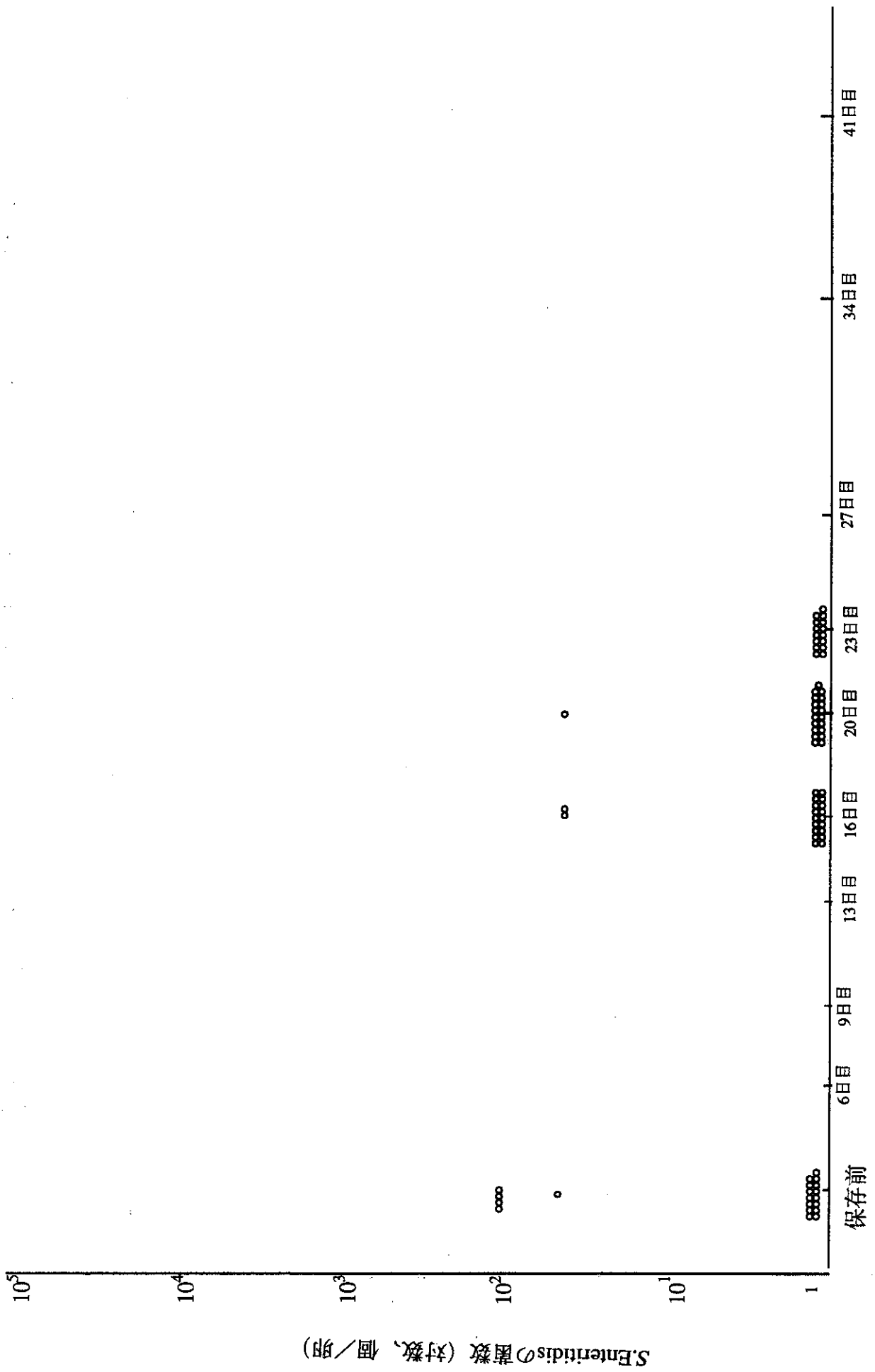


図5 秋期産卵の卵における10°C保存時の *S. Enteritidis* 増殖性

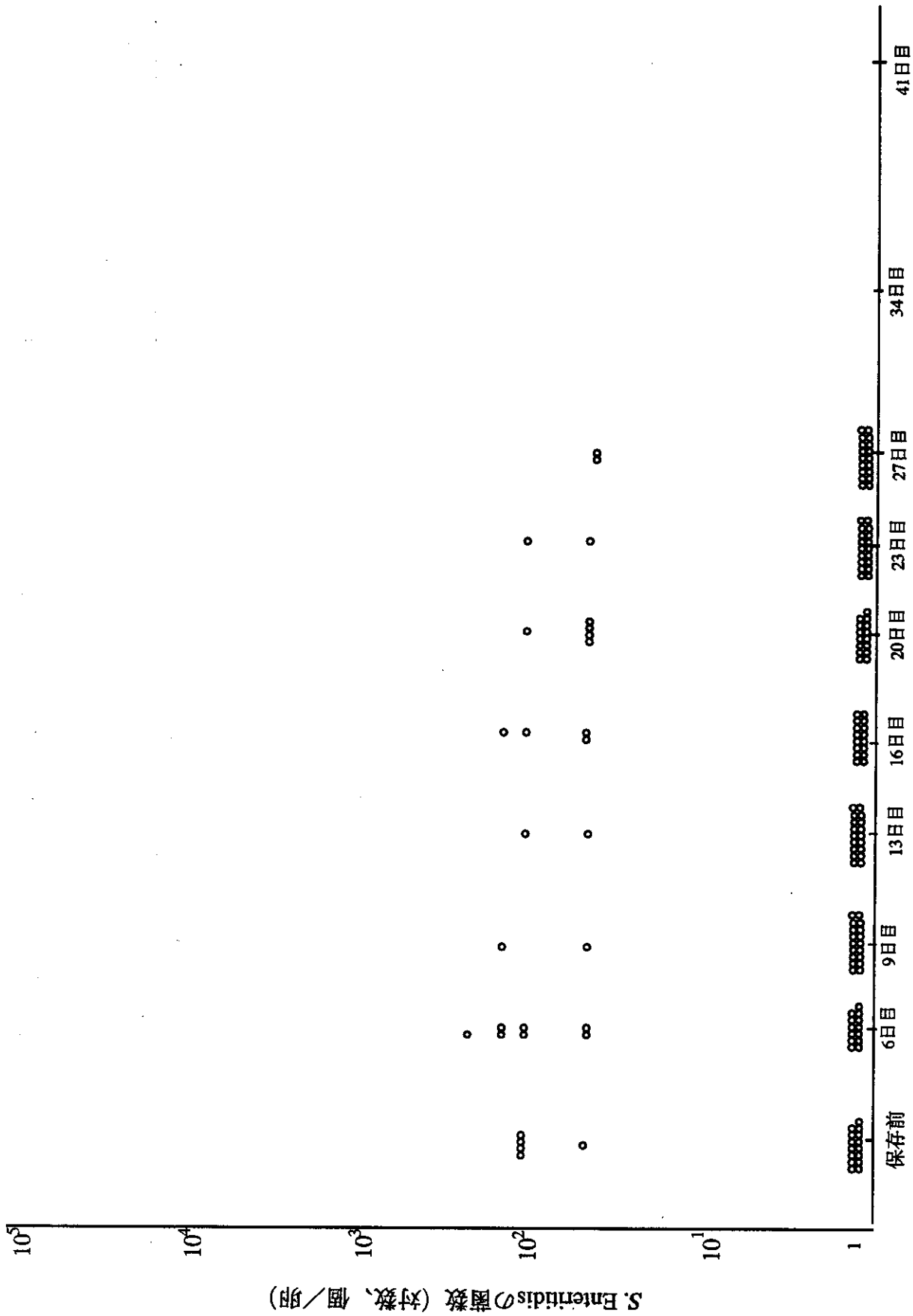


図6 秋期産卵の卵における20°C保存時の S. Enteritidis増殖性

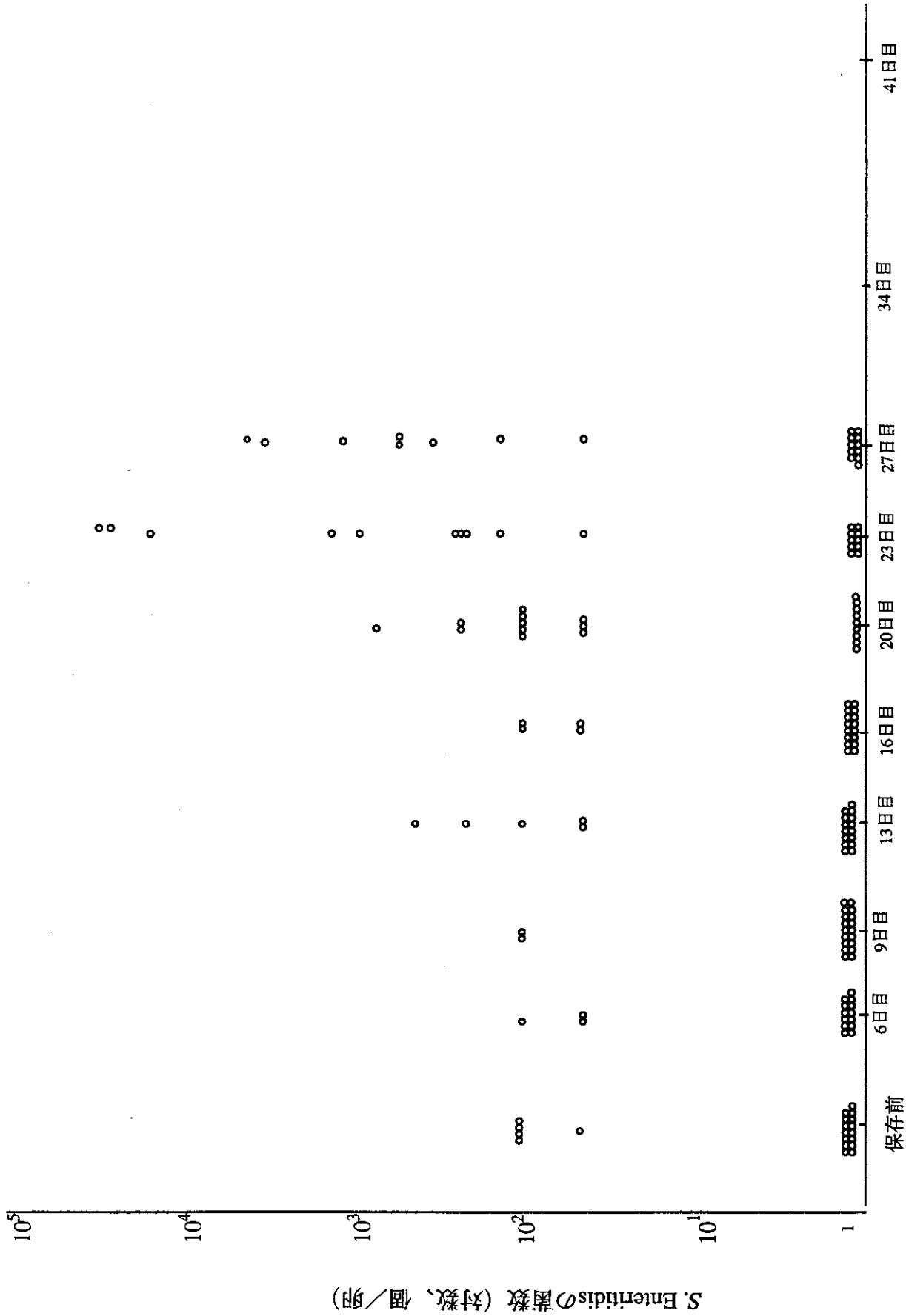


図7 秋期産卵の卵における30℃保存時の S. Enteritidis増殖性

産卵後の日数

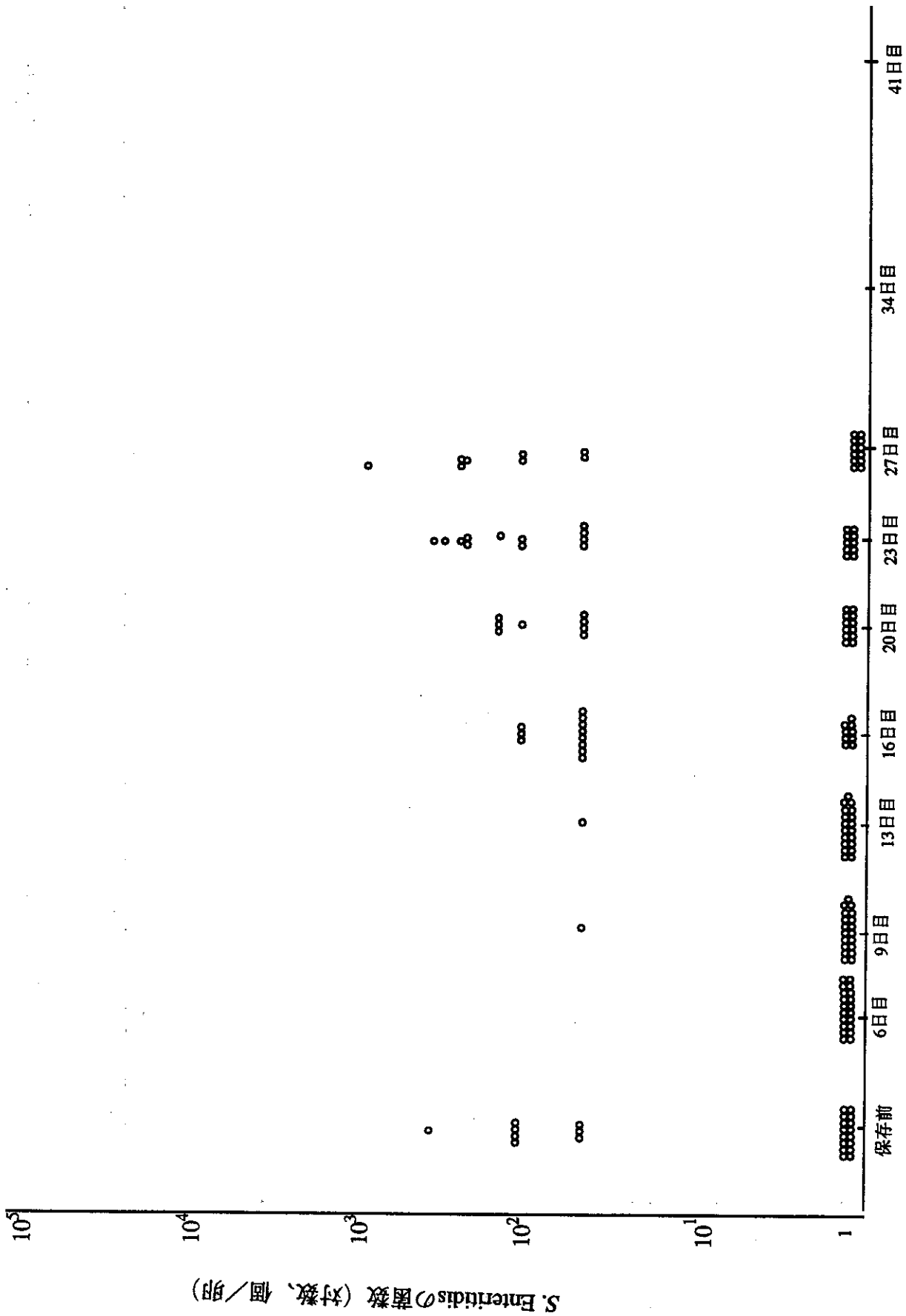


図10 秋期産卵のひびの入った卵における20°C保存時の S. Enteritidis増殖性

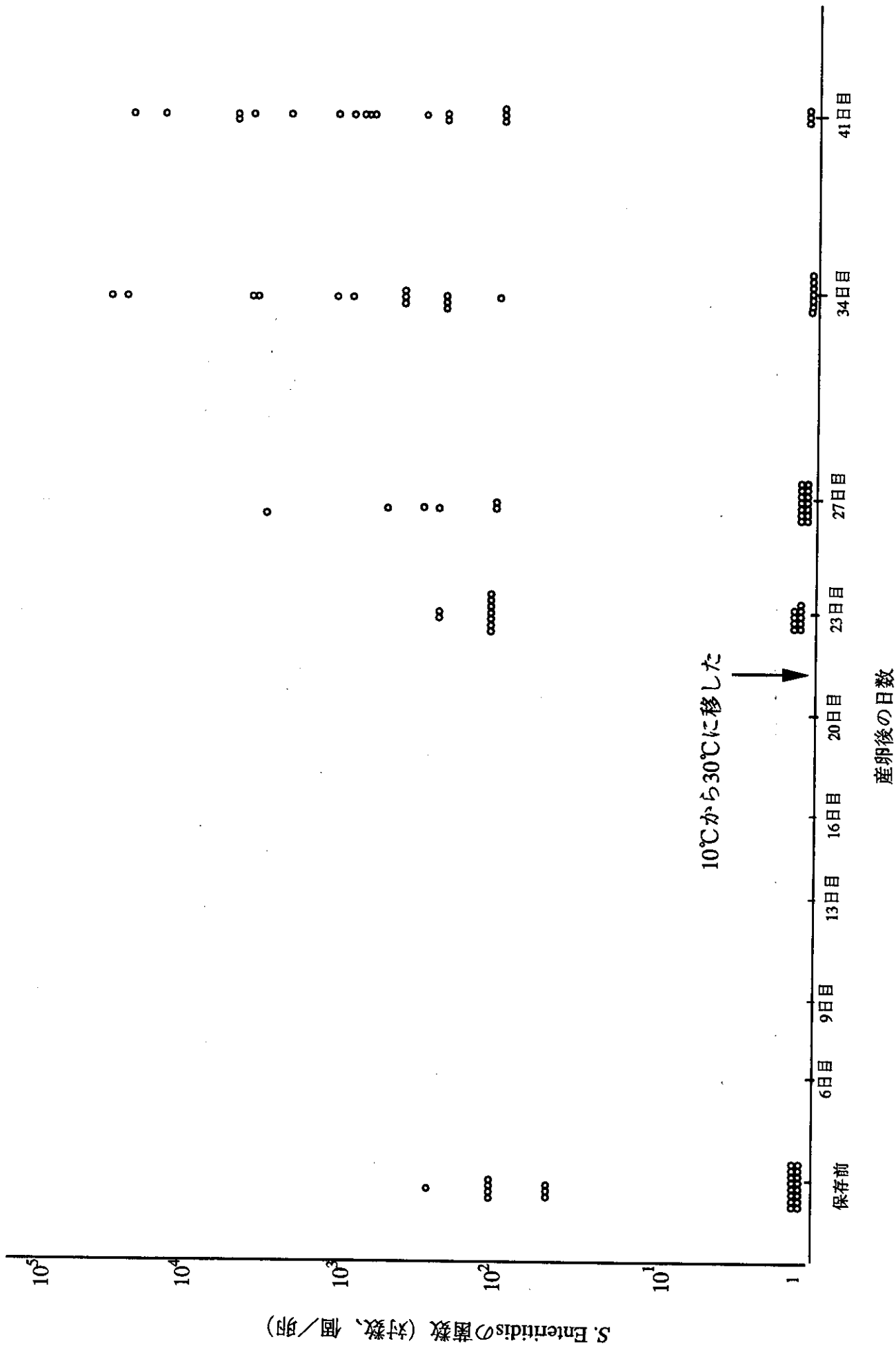


図12 秋期産卵のひびの入った卵における10°Cから30°C保存時の S. Enteritidis増殖性

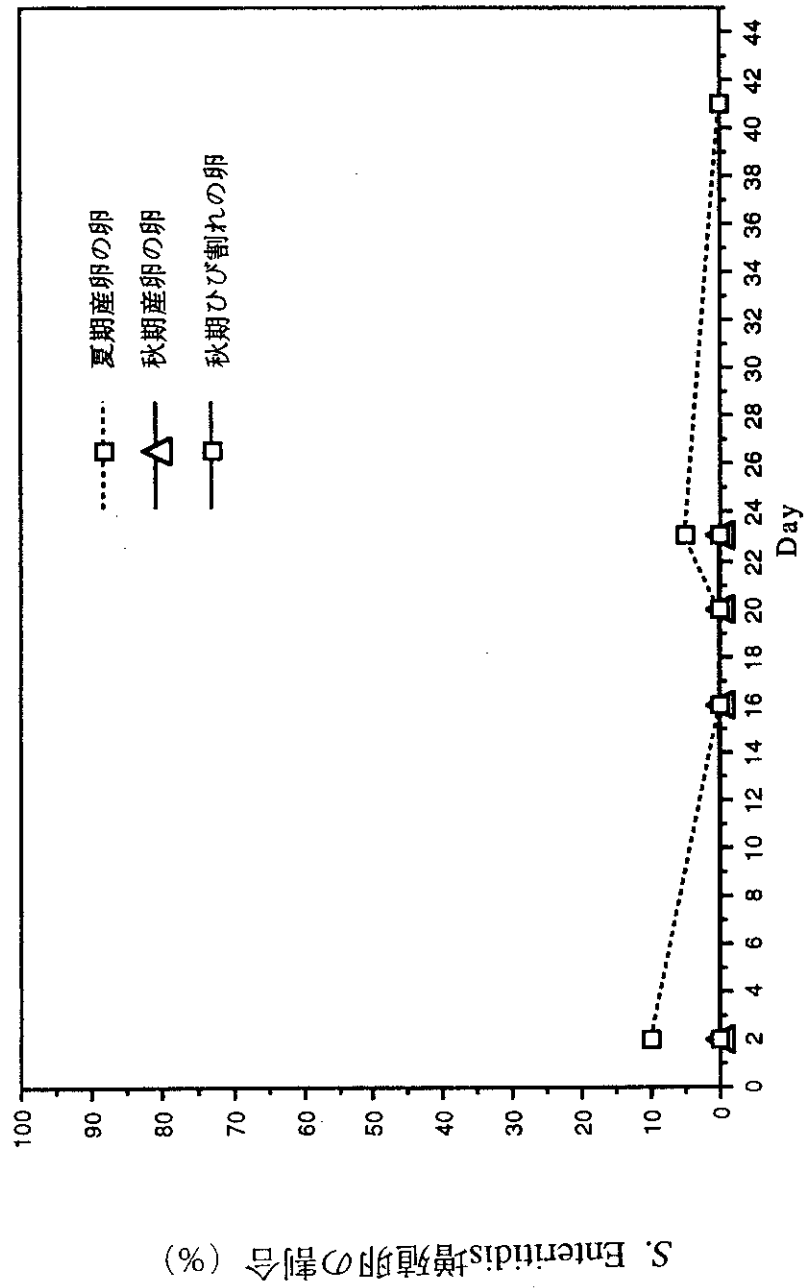


図13 10℃保存時の卵1個当り500コ以上に*S. Enteritidis*が増殖した卵の割合

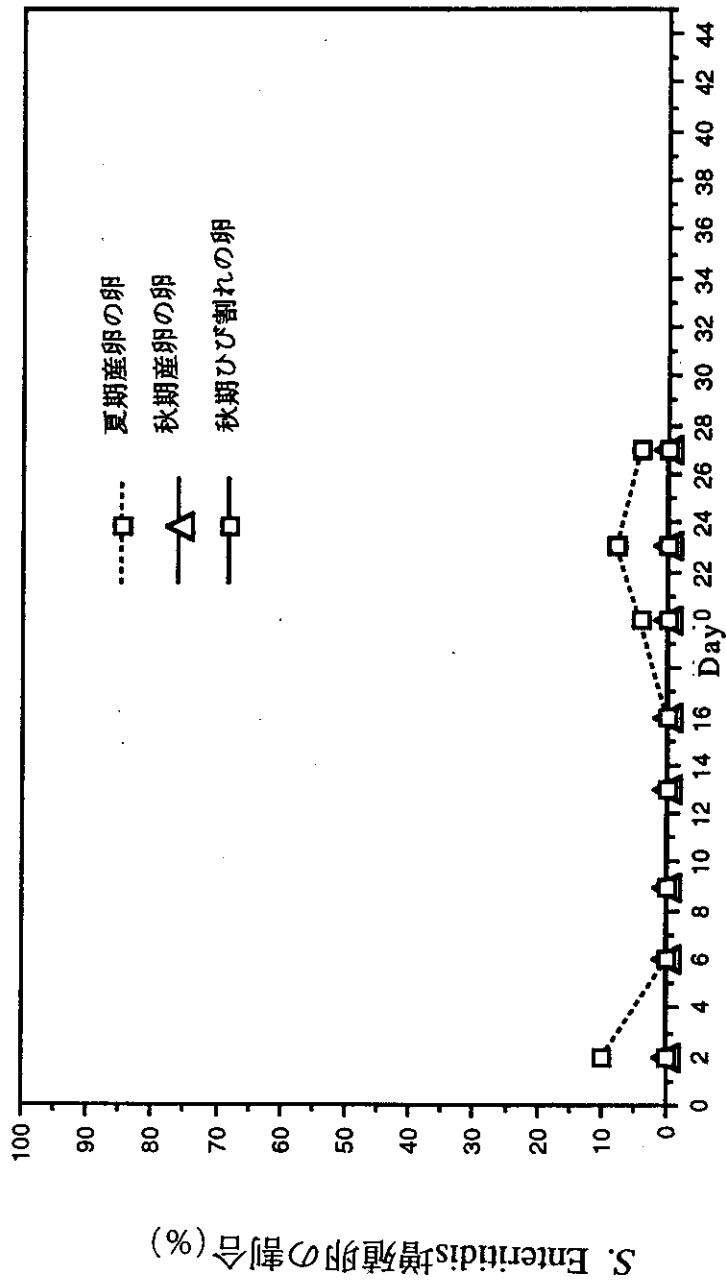


図14 20℃保存時の卵1個当り500コ以上に*S. Enteritidis*が増殖した卵の割合

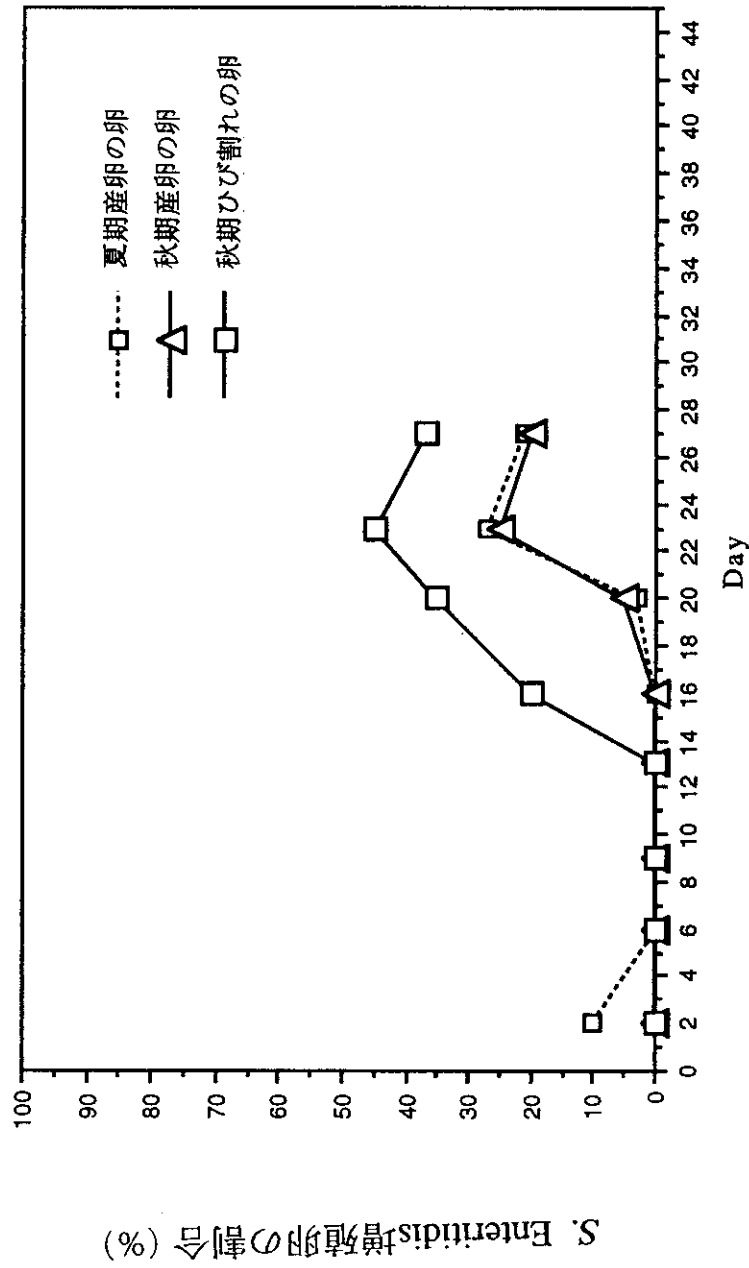
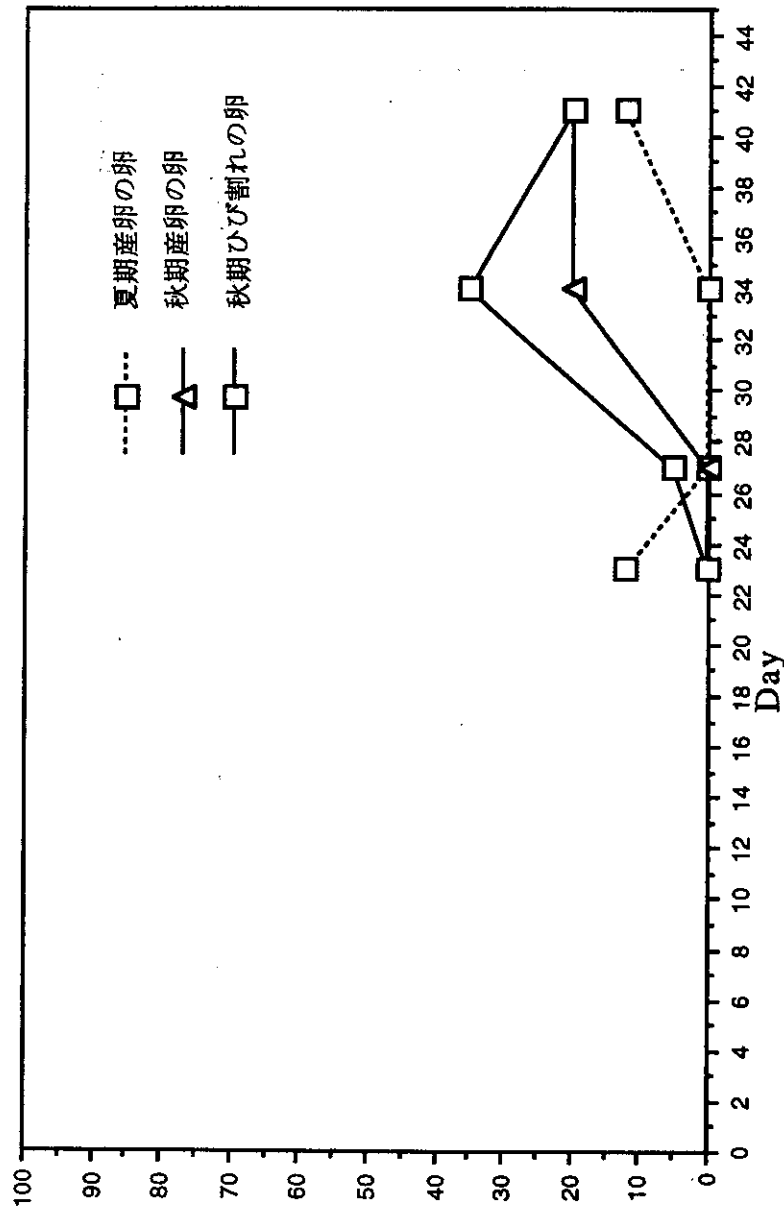


図15 30°C保存時の卵1個当り500コ以上にS. Enteritidis増殖した卵の割合



S. Enteritidis増殖卵の割合 (%)

図16 10℃から30℃保存時の卵1個当り500コ以上にS. Enteritidisが増殖した卵の割合

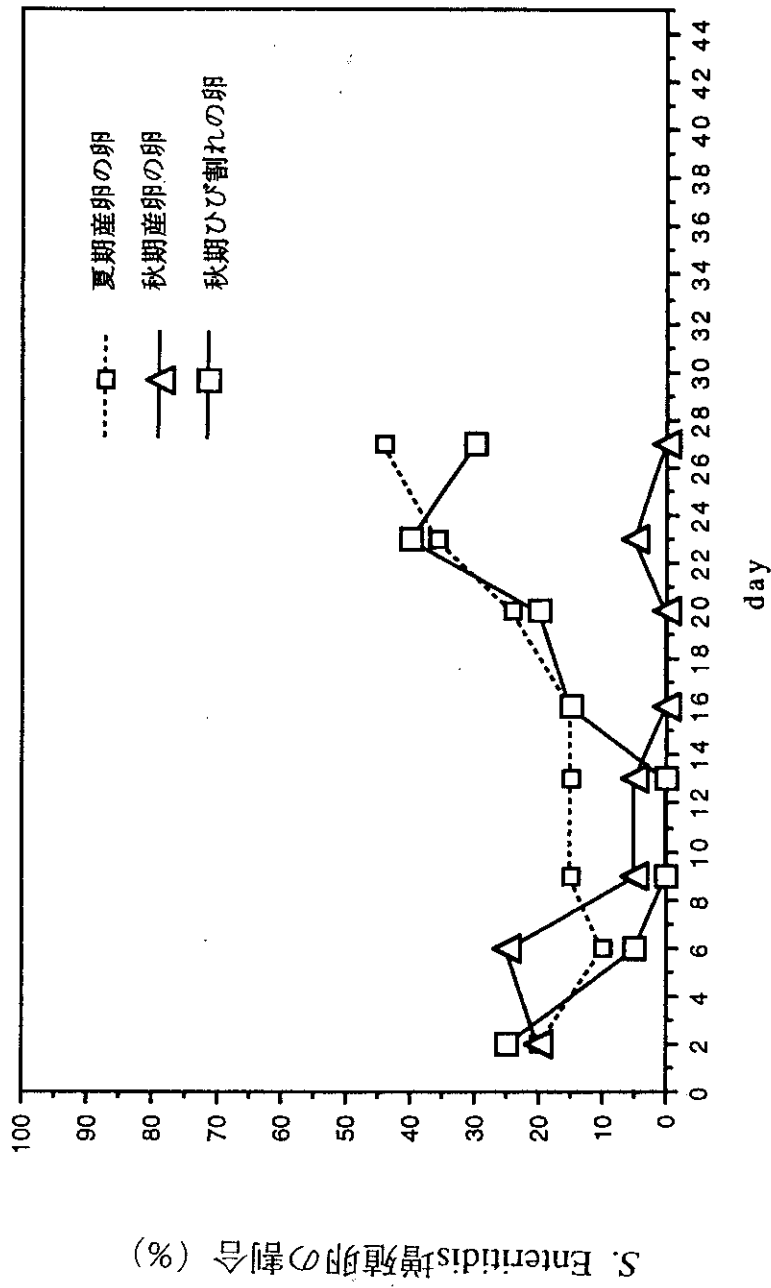


図17 20°C保存時の卵1個当たり100コロ以上にS. Enteritidisが増殖した卵の割合

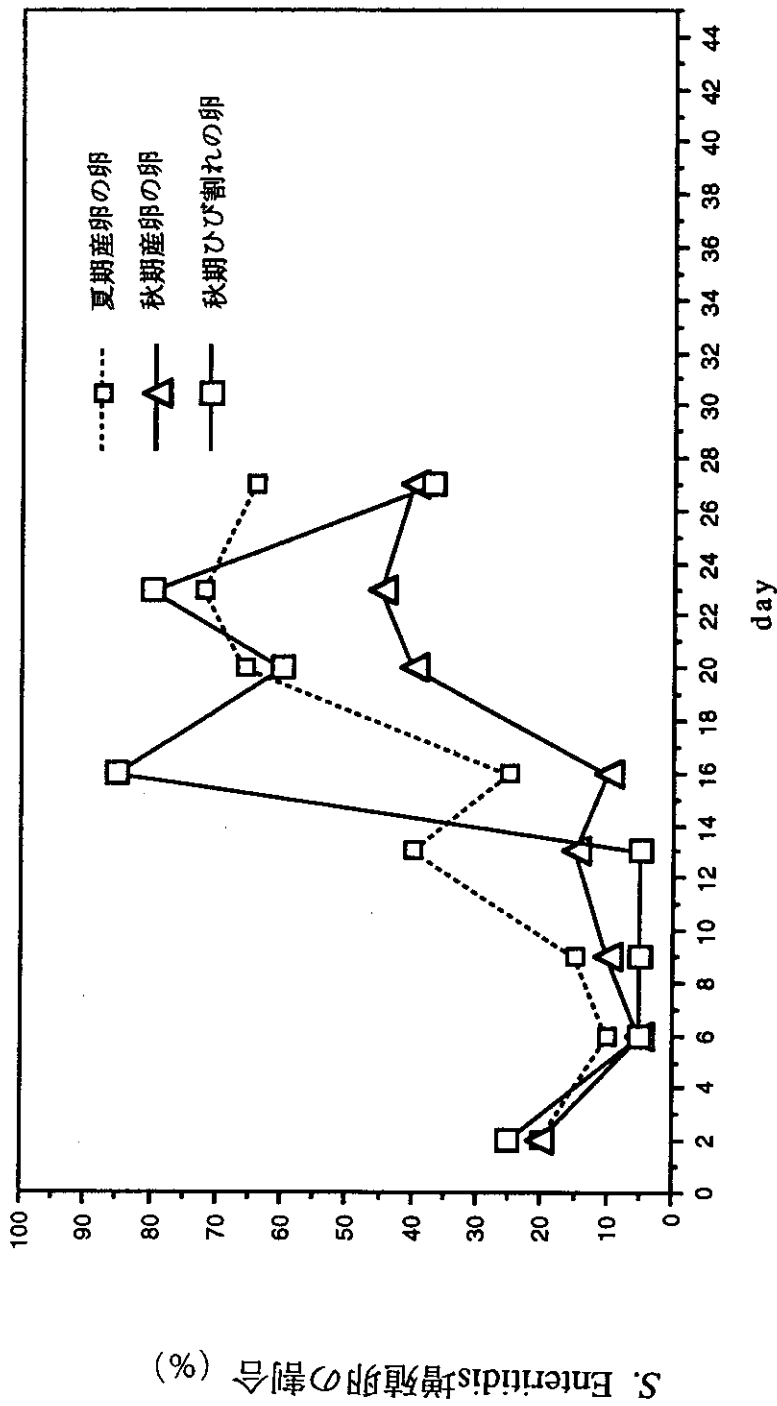


图18 30°C保存時の卵1個当り100コ以上に*S. Enteritidis*が増殖した卵の割合

厚生科学研究費補助金（新興再興研究事業）

分担研究報告書

食品汚染腸炎ビブリオの検出方法

分担研究者：熊谷 進

研究協力者：工藤由起子（国立感染症研究所）

食品からの腸炎ビブリオ検出に必要な選択分離培地および増菌方法について、腸炎ビブリオにより自然汚染されている魚介類を検体として比較検討した結果、増菌培養方法としては2%NaCl加TSB培養（37℃6時間）後に食塩ポリミキシンプイオン培養（37℃18時間）、または食塩ポリミキシンプイオン培養（37℃18時間）が、選択分離培地としてはTCBSよりもクロモアガー・ビブリオの方が、分離の容易さにおいて比較的優れていることが認められた。

A. 研究目的

腸炎ビブリオ食中毒事例が急増してきたことから、予防対策の構築が急がれている。食中毒の原因となる菌は、腸炎ビブリオの中の毒素産生株であることがわかっている。この毒素産生株は従来より患者糞便からは分離されるものの食品や環境中からは極めて低頻度にしかならなかつた。その一要因として、競合する菌が多数存在する中から、少数しか存在しない目標とする腸炎ビブリオを分離することが困難であることが考えられる。本研究の目的は、食品からの腸炎ビブリオ検出に必要な選択分離培地として酵素基質を利用した培地の有用性を検討するとともに、増菌方法についても実用的で優れた方法を見い出すことにある。

B. 研究方法

（実験1）

検体として市販のアサリむきみおよびアジを用いた。アジは表面とえらを含めたものを検体とした。増菌培地として、2%NaCl加TSB(Difco)、アルカリペプトン（日水）、食塩ポリミキシンプイオン（日水）、アルカリペプトン（日水）を用いた。平板培地として、TCBS(Oxoid)、TCBS（日水）、クロモアガー・ビブリオを用いた。増菌方法として以下の4方法を用いた。

一次増菌

1) 2%NaCl加TSB（37℃6時間）1ml

二次増菌

アルカリペプトン（37℃18時間）